［事業報告］

地域社会学におけるフィールドワーク実施報告（2020年度）

中村　洋

山陽小野田市立山口東京理科大学　共通教育センター

Fieldwork Implementation Report in Community Sociology（AY2020）

Hiroshi NAKAMURA

Center for Liberal Arts and Sciences, Sanyo-Onoda City University

要約（Abstract）

本学工学部 2 年生を対象に開講されている「地域社会学」は、学生が山陽小野田市内でフィールドワークを行い（地域に出て調査を行い）、自分が集めたデータを統計的に分析し、課題の解決方法を考える授業である。2020 年度は山陽オートレース場、きららガラス未来館、サビエル高等学校でフィールドワークを行い、自らが収集したデータを統計的に分析し、課題の解決方法をフィールドワーク先に提案した。

Key words：Statistical analysis, Regional understanding, Solving regional difficulties,
キーワード：統計分析、地域理解、地域課題解決

1 地域社会学の概要

本学工学部 2 年生を対象に開講されている「地域社会学」は、学生が山陽小野田市内でフィールドワークを行い（地域に出て調査を行い）、自分が集めたデータを統計的に分析し、地域課題の解決方法を考える授業である。以下に 2020 年度の「地域社会学」で行ったフィールドワークの概要と、自らが収集したデータを統計的に分析した結果から考え、フィールドワーク先に提案した解決策を概観する。

2 フィールドワークの概要

フィールドワークを山陽オートレース場、きららガラス未来館、サビエル高等学校において、それぞれ 2 回行った。1 回目のフィールドワークの目的は、現場に行き、現物を見ながら、フィールドワーク先の概要や抱える課題について説明を受け、何のために、どのような調査をするかを考えるための情報を収集することである。2 回目のフィールドワークは自ら作成した調査票を用いて調査を行った。以下に 3 か所で行ったフィールドワークを報告する。

2.1 山陽オートレース場

学生 3 名が山陽オートレース場を担当した。1 回目のフィールドワークとして、10 月 8 日（木）に学生が担当教員とともに同場に出向き、桶谷一博氏（山陽小野田市経済部公営競技事務所 所長）から、オートレースや同場について学び、来場者が減少していることが課題であるとの説明を受けた。その後、学生たちは学内で来場者の減少要因を明らかにし、対策を検討するための情報を得るための調査計画を立案し、調査票を作成した。作成した調査票は性別や年齢といった属性に関する質問、来場方法・頻度・予算などの山陽オートの利用に関する質問、山陽オートの来場理由に関する質問で構成された。調査票を用いて、11 月 29 日（日）の 2 回目のフィールドワークにおいて、学生は山陽オートレース場の来場者に調査を行った。同場からの要望により、学生が質問を読み、調査対象者から回答を得て、学生が調査票に記入する他記式を用いた。回収率は 64.3 %（n=18）であった（調査依頼数 28 人、回収数 18 人）。

2.2 きららガラス未来館

学生 3 名がきららガラス未来館を担当した。1 回目のフィールドワークとして、10 月 5 日（月）に学生たちが担当教員とともに同館に出向き、湯城明彦氏（富士商グループホールディングス 資産活用本部 経営企画部 地域開発室 室長 兼 きららガラス未来館 館長）から、同館のことや同館で行っていることを学び、来館者数が減少していること、大学生の利用者が少ないことが課題であるとの説明を受けた。その後、学生たちは来館者数の減少対策と、大学生の利用者を増やす方法を考えるための調査計画を立案し、二つの調査票を作成した。一つ目の調査票は、きららガラス未来館における調査のためのもので、性別や年齢、居住する市、職業、SNSの利用頻度といった属性や、きららガラス未来館を知ったきっかけ、来館方法や目的、参加したイベントの満足度、周辺施設の認知度や利用度で構成された。二つ目の調査票は学内における調査のためのもので、性別や高校まで住んでいた地域、今住んでいる地域、SNSの利用時間といった属性と、きららガラス未来館の認知や来館・体験回数、ガラス製品の創作体験への意欲や体験する際に重視することで構成された。

一つ目の調査は 11 月 22 日（日）に、きららガラス未来館に、ガラスのハンコづくりの体験に来ていた人たちに協力を依頼し、承諾を得られた人から自記式で回答を得た。回収率は 100 %（n=28）であった（調査依頼数 28 人、回収数 28 人）。二つ目の調査は 12 月 1 日（火）に、本学の吉村敏彦教授の承諾を得て、授業に参加していた本学工学部機械工学科 2 年生に対して、授業後に調査への協力を依頼し、承諾を得られた学生から回答を得た。回収率は 100 %（n=60）であった（調査依頼数 60 人、回収数 60 人）。

2.3 サビエル高等学校

学生 2 名がサビエル高等学校を担当した。1 回目のフィールドワークとして、10 月 9 日（金）に学生が担当教員とともに同校に出向き、友廣洋氏（同校副校長）から、サビエル高等学校の歴史や特徴、在籍する学生の傾向を学ぶとともに、同校が共学化された後も男子学生数が増えないことが課題であるとの説明を受けた。その課題の解決策を考えるために、学生たちは二つの調査を行うことを計画した。一つ目はサビエル高等学校の男子生徒へのグループ・インタビューである。二つ目は中学 3 年生への高校選択理由に関する構造的な調査票を用いた集合調査である。

グループ・インタビューは、12 月 14 日（月）に本学の学生 2 名がサビエル高等学校に出向き、同校内の教室において、1 年生の男子生徒 9 名に、サビエル高等学校に進学した理由、同校の良いところ、男子中学生が同校を進学先とするためのアイディアを聞き取った。グループ・

インタビューの結果から、サビエル高等学校に進学した理由として、家から近いなどの立地の問題や英語に力を入れていることが挙げられた。同校の良いところとして、先生が親身になって教えてくれ、職員室前での個別指導をしてくれることや中間テストではなく、単元ごとのテストがあるので、学習内容が定着しやすいことが挙げられた。男子中学生が同校を進学先とするアイディアについては、少ないものの男子生徒が増えつつあることをアピールしてはどうか、男子生徒の制服を変更してはどうかという意見が得られた。

中学 3 年生への集合調査は、山陽小野田市教育委員会及び高千帆中学区の協力を得て、12 月に高千帆中学校の 3 年生 155 名に対して、同校の教員を通じて行った。回収率は 95.5 %であった（配布数 155 名、回収数 148 名）。調査票は性別、通学手段、運動部・文化部の所属といった属性、高校を選ぶ際に重視する要因、高校を選ぶ際の部活動の重視、共学だと思う学校の計 4 項目で構成された。高校を選ぶ際に重視する要因としては、学力水準、文理の選択幅の広さ、自分が学びたいことを学べる、英語教育に力を入れている、大学進学実績、高校の教育方針、通いやすさ、学校や設備が綺麗、制服がかっこいい・おしゃれ、学校の雰囲気、先輩が在学している、友人が目指している、男女比率が偏っていない、学費が安い、学費免除などの制度がある、山陽小野田市内の高校である、私立の高校であるの計 17 項目を聞いた。それに加えて、山陽小野田市や宇部市にあり、過去には女子高であったが現在は共学である私立・公立高等学校について、共学だと思う学校を聞いた。

3 学生による分析・提案

学生はフィールドワーク後に統計的な分析を行った。分析結果を踏まえて、フィールドワーク先に課題の解決方法を提案した。山陽オートレース場の桶谷氏に対して学内で、きららガラス未来館の湯城氏にも学内で、学生が調査結果・分析・提案についてプレゼンテーションを行った。サビエル高等学校については、本学の学生が同校に出向き、同校の校長、副校長にプレゼンテーションを行った。

3.1 山陽オートレース場

分析方法は属性と来場理由の相関分析、月あたりの来場日数と来場理由の相関分析、来場理由間の回答の違いに関する検定である。

属性と来場理由に関する相関分析から、年齢が若いほどレジャーを目的として来場していることが分かった。このことから、学生は山陽オートレース場にレジャー施設や子どもが遊べる施設を設けることにより、若い人たちが来場するようになり、来場者の増加につながるのではないかという提案を行った。

月あたりの来場日数と来場理由に関する相関分析から、来場日数が多い人ほど、会話することを目的として来場している傾向が見られた。この結果から、学生は山陽オートレース場で、同じ予想をした人が近くに座ることで、会話が盛り上がりやすいといった座席配置の工夫をすることで、来場日数が増えるのではないかという提案を行った。

来場理由間の回答の違いに関する検定から、休日のレジャーを目的とした来場理由が、選手を生で見るため、レースを生で見るため、暇つぶし、賭け事をするため、会話を楽しむため、イベントで来る有名人を見るためといった来場理由よりも重視されている傾向が見られた。この結果から、学生は休日や土日に本場開催を増やすことで来場者が増えるのではないかという提案を行った。学生からは調査の課題として、回答数の少なさ、高齢な人や男性に偏ったことが挙げられた。

3.2 きららガラス未来館

学内の調査で得られたデータの分析方法は、SNSの利用時間と同館での体験内容の認知度、SNSの利用時間と同館の来館回数、ガラス製品の創作体験への意欲と同館があること、同館のある場所、同館で体験できることを知っているかの回答について相関分析を行った。

SNSの利用時間と同館で行える体験内容の認知度に関する相関分析の結果、SNSの利用時間が長いほど、同館における体験内容の認知度が高いことが分かった。SNSの利用時間と同館の来館経験に関する分析結果から、SNSの利用時間が長いほど、きららガラス未来館の来館回数が多いことが分かった。ガラス製品の創作体験への意欲と同館があること、同館のある場所、同館で体験できることの認知度に関する相関分析の結果から、体験内容を知っているほど創作体験への意欲が高いことが分かった。これらの結果から、本学の学生はSNSを用いた情報発信を行うことにより、体験内容の認知度が高まり、体験意欲が高まり、その結果、同館を利用する大学生数が増加するのではないかという提案を行った。

3.3 サビエル高等学校

分析方法としては、中学生への調査結果について男子生徒と女子生徒の回答の違いを検定するとともに、属性

と共学だと思う学校の回答について相関分析を行った。検定の結果、男子中学生は女子中学生に比べて、高校を選ぶ際に制服を重視しない傾向が見られた。この結果を踏まえ、本学の学生は、サビエル高等学校は他校とは変わった制服であることを強調し、興味を持たせることにより、男子生徒が増えるのではないか、そしてその制服の意味合いを説明することで、サビエル高等学校への理解が深まるのではないかと提案した。相関分析の結果から、通学手段が徒歩、自転車、車・電車となり、遠方から通学する中学生ほど、サビエル高等学校を共学だと認識していない傾向があることが分かった。これらの分析結果から、本学の学生は、遠方の中学生に対して共学であるという認識を高めるために、遠方の学習塾などにポスターで広報することを提案した。

4 まとめ

担当教員として、フィールドワークの成果と課題を整理する。

成果としては、学生が山陽小野田市内でフィールドワークを行い、自分が集めたデータを統計的に分析し、地域課題の解決方法を考え、フィールドワーク先に提案するという一連の流れを経験できたことである。

しかし三つの課題がある。一つ目は分析に用いるサンプル数の少なさである。山陽オートレース場の来場者数は多いものの、フィールドワーク時の学生の安全確保と、本学から同場への移動手段の問題から、少数の学生で調査をせざるを得ない。きららガラス未来館は 1 日の来館者数が少ない。サンプル数が少ないことで統計的な分析の幅が狭まるという課題があった。二つ目は統計処理そのものの問題である。授業ではエクセルを用いて統計処理を行っているが、それは授業内で統計ソフトの操作方法を教える時間を確保することが難しいためである。エクセルを用いることで、簡素な統計処理しか用いることができていない。三つ目は、学生の参加モチベーションの向上である。学生の提案が実際にいかされるかどうかが分からないこともあり、調査から提案までを行うモチベーションが十分に高まっていないことが考えられる。

今後の改善策として、一つ目の課題に関しては、同じ内容の調査を複数の場所で行えるようにする、もしくは一度に多くのサンプルを得られるようなフィールドワーク先を確保することで、サンプル数を増やせるようにしたい。二つ目の課題に関しては、別の授業において統計ソフトを活用する方法を教えることを考えたい。三つ目の課題に関しては、山陽小野田市やフィールドワーク先と連携し、学生の提案が社会に実装されるような調整を事前に行いたい。このような調整ができれば、次年度以降、学生の提案が地域に与えた影響を調査するフィールドワークを行うこともできる。